

心理臨床を茶の湯に見立てる

－心理臨床と茶の湯文化の心理・空間的比較－

藤本 航平

1. はじめに

心理臨床の分野において、心理的な空間に関する論考はこれまで幾人もの論者によってなされてきた。近年ならば中藤(2013)等による人の居場所の感覚に注目した論考などが挙げられるだろう。精神分析の領域では、Winnicott(1971)や Ogden(1986)等が人間の創造性の根本に関わるような基盤的な心理的空間として様々な概念を提唱し、論じてきた。Winnicott(1971)は、精神分析において分析者と被分析者は、遊びの感覚を基盤に営まれるひとつの特殊な文化的空間を形成していると述べている。また、その文化的空間を支える重要な要素として、「そうすることが必然である」というような感覚に覆われた空間とは対照的な心理的空間を可能性空間として概念化した。可能性空間とは、様々な理解・体験を象徴的に遊ばせることのできる空間と考えられ(上田,2013)、そのような心理的空間の保障こそ、心理療法において治療的な創造性を促進することに繋がるとされる(上田,2013)。また Ogden(1986)は、可能性空間の崩壊は「事態を象徴的に思考することから我々を疎隔する」と述べている。つまり精神分析のひとつの文脈においては、この可能性空間というものは、人間の象徴機能の有する創造性に基礎を置く心理療法にとって支柱となるような、中核ともいえるような意義を与えられていると考えられる。

2. Ogden の「第三主体」

Ogden(1994)はまた、「分析家と被分析者のあいだに働く間主体性」、つまり分析家と被分析者が関わり合う体験のひとつの様式を「第三主体」と名付けた。第三主体という概念は、分析家と被分析者とが関わり合う体験自体のみならず、「その中で」両者が、「その時点までそうであったものとは異なるものになる『体験する私性』の一形態」を意味するとされる。この概念はウィニコットの心理的空間のアイディアの影響を受けつつも、精神分析という営みにおいて起こる内的変化に関わるものとして、独自の要素を含んだ重要な概念であると考えられる。そして「あいだに」、「その中で」という表現が使われていることからこの概念はある種の空間的性質をもつと考えられるが、その空間性はあくまでも心的に発生するものであり、そしてその中で参与者にとって非意図的な変化が生じるという点では無意識的に発生するものであると考えられる。Ogden(1994)自身、第三主体について、「あいだの空間」という表現も用いており、そのような空間性に関する意図があることがうかがえる。Ogden(1994)は、このような個人性と間主体性の無意識的な弁証法的相互作用の心理・空間的理解は、「個人であることと集団でいることの、相互に創り出し合い、打ち消し合う相互作用の性質に関心を持つすべての日本人」に意

義のあるもので、日本文化に関するある種の側面を解明するのではないかと述べている。確かに上記のような心理的空間に関する心理臨床実践領域における概念的要素と、日本文化における様々な心理的空間の概念的要素との比較検討は上記のような意味でも今後待たれるところであると考えられる。また、その比較検討からは、日本文化に関して有益な知見が得られるのみならず、心理臨床実践の分野において展開される心理的空間に関する有用な知見が得られる可能性もあると考えられる。本論では、日本文化の中でも、精神的、あるいは心理・空間的な要素が高く構造化されていると考えられる、茶室という空間を中心とした茶の湯文化との探索的な比較検討から、心理臨床分野、そして茶の湯文化双方にとって有益な知見を得ることを目的としたい。おそらく、ある部分に関しては共通点が見出され、またある部分においては相違点が見出されるだろう。そのような点を起点として考察する中で、両者それぞれに有用と思われる知見を明らかにしたい。

3. 日本における茶の湯文化

茶の湯、つまり茶を飲むことに関する文化は、元々中国において8世紀までに形成されたとされるが、日本の茶の湯文化はこの流れを受け、道教や禅道の影響を受けつつも、15世紀に至り独自の審美的な儀式、茶道として洗練されたとされる(Okakura, 1906)。歴史的には、日本では鎌倉時代末期から南北朝にかけて、人々の間に普及した茶寄会がその始まりとされ、茶寄り会では人々は一定の場所に寄り合って、抹茶の飲み比べを行った(笠井, 1991)。これは闘茶とも呼ばれ、酒宴を伴う物であった。その後、室町時代初期から中期にかけて、上流の武家社会では書院造の広間で催される、豪勢な唐物の鑑賞を主眼とした審美性の強い茶会が開催された。一方、その後、村田珠光が創始し、そして武野紹鷗が洗練し、千利休によって大成されたとされる「わび茶」は、以上の茶の湯文化と比較すると異質なものであった。わび茶では、鎌倉末期の茶寄会や室町初期の茶会のような遊興的・享乐的、あるいは豪勢な要素は取り払われ、簡素な造りの草庵を茶室とし、その中で茶会が行われた。そしてそこでは亭主の手前の所作・振舞等によって亭主と客、客と客とが飲食を楽しみながら交わりを楽しんだ(笠井, 1991)。わび茶にも審美的性質はあるものの、室町初期のような豪勢さを楽しむようなものではなく、わび、つまり自然さ、不完全さを楽しむようなものであり、日常的なものの中にもある美を、簡素な造りの空間である茶室において感じるといった要素が強い。笠井(1991)は、わび茶の神髄は、わびの美によって支えられた人間の交わりである旨を述べている。そのような点から、わび茶は茶の湯において、一種の精神性を追求する茶室という空間を構造的に形成してきた文化と捉えられる。本論においては、歴史的に精神・心理的な要素、あるいは人々の関わりや空間の要素に着目している文化という点で、茶の湯の中でも、特にわび茶の要素を以後中心として述べていきたい。以上述べてきたように、わび茶文化は人間の心理・精神的な要素、そして人々の関わりや空間の要素に着目している点において、精神分析あるいは心理臨床文化と類似しており、比較に適していると考えられる。尚、わび茶を大成したとされる千利休自身の著作は現代まで殆ど伝わってはいないが、その弟子等が精神的要諦に関する教えを書き残している書物が多く残っているため、以下必要に応じてそれらを参照したい。

4. わび茶の構造(茶室の空間的観点から)

それでは、上記のようなわび茶の文化は具体的にどのように形成されているのだろうか。以

下、茶会が実践される茶室の空間的観点、そしてわび茶における茶会の運用的観点から、そこで展開されると考えられる心理的空間の構造について明らかにしていきたい。

わび茶における茶室の空間的な観点としては、その導入部分として露地、茶室入り口である躡口、そして茶室そのもの等が構造的な特徴として挙げられる。

まず露地とは茶室の庭であるが、同時に茶室に至るまでの道にもなる空間のことである。露地には蹲(つくばい)という、手を水で洗い流すことのできる装置が設置されている。客はここで身を清めつつ、茶室という特別な空間へと向かう道を歩く。また、茶室に入った後には、自身が歩いてきた道でもある露地を美的な意味で鑑賞することになるのである。Okakura(1906)は、露地は外界との関係を断ち、黙想の第一段階、すなわち自己照明に達する通路であると述べているが、露地は茶室という物理的な空間に向かう客を、同時に心理的な非日常性をもった空間へと導く役割を有すると考えられる。また、客は、構造的に自身の歩んできた露地を茶会中改めて鑑賞することになるが、その際には、自身の歩んできた現実的な道のりを、Okakura(1906)のいう自己照明的な道として、美的な観点でもって振り返る空間として象徴的に認識することにもなりうると考えられる。

次に躡口とは、茶室の入口のことを指すが、一般的な人間の背丈に比して、非常に狭く作られていることがその特徴である。これについては、15世紀当時から、身分の高低に関係なく、全員が身をかがめて入室することを必要とする構造を有していた点が重要と考えられる。また帯刀したままの入室が難しい構造であることも重要と考えられる。つまり、躡口を通して茶室に入室するということは、全ての者が頭を下げて入室すること、あるいは自身の刀を身から外して入室することを意味する。Okakura(1906)はこの構造に関して、身分の高低に関わらずすべての客に謙譲を教え込むための義務的な要素と述べている。この構造によって、当時、躡り口を通して茶室空間へと入る者は、同時に現実的な身分の高低の無い心理的空間、あるいは加えて刀に象徴されるような現実的な力を及ぼすことのできない、あるいはその中で現実的な力を行使することが適切ではないとみなされるような心理的空間へと足を踏み入れることとなった可能性が考えられる。

最後は茶室そのものについてである。わび茶における中心行事である茶会が開かれるこの茶室の心理・空間的な意義としてはさまざまなことが挙げられるが、その多くは茶会の運用的観点にも関連すると考えられることから、次章にて詳述する。ここではその中でも最も空間的に影響力が大きく、かつわび茶に独自の要素となっていると考えられる特徴をひとつ紹介したい。それは茶室空間の狭さである。それまでの茶会が大広間で行われていたのに対し、わび茶の茶会は四畳半未満の茶室にて行われることがよしとされた(笠井,1991)。これによって、わび茶では物理的に空間が凝縮され、茶をたてる亭主と客との距離はぎりぎりのところまで狭められた。そのことは、亭主と客、客と客とが互いに一挙手一投足を具に見つめ合うようになったことを意味した(笠井,1991)。つまりわび茶における茶室空間の縮小化は茶会における人と人との交わりの緊密化を目指したものと考えられるが(笠井,1991)、そのことは茶室内にある種の緊張感のある心理的空間を生み、より人々の緊密な交わりを促進したと考えられる。

5. わび茶の構造(茶会の運用的観点から)

以上のように、茶室空間は、その中で人々の緊密な交わりが生じるように構造化されている

と考えられる。それでは、そのような人々の交わりとしての茶会とはどのようなものなのだろうか。以下、茶会の運用的な観点から述べていきたい。

わび茶の構造についての茶会の運用的な観点としては、まず亭主・客間で「よそおい」、「しつらい」、「ふるまい」に趣向をこらした美的交流がなされることが挙げられる。茶会における交流様式のひとつである「おもてなし」は大きくこの3要素に関して構成される(五嶋・中村,2009)。よそおひとは、季節や場に応じて身なりや外観を整え、飾ることである。「しつらい」は時と場に応じて部屋を家具や掛け軸、花などで飾り、整えることである。「ふるまい」は時と場に応じたよそおひや、ふるまいにふさわしい態度や身のこなしをすることである。基本的には質素な構造を有する茶室において、それらの点に関しては趣味を出すこと、趣向をこらすことが求められる。以上の3要素は次に挙げる「一座建立」という、茶会の目的(笠井,1991)とされることにも深く関わってくると考えられる。

一座建立とは、千利休の高弟である山上(1588)の記した『山上宗二記』に登場する言葉である。一座とは人々が寄り合う場を意味する。そして建立とは通常寺院等を建てる場合に用いられる言葉であるが、作り上げる、成立させるということの意味する。よって、茶会の文脈で用いられる場合、寄り合った人々が心をひとつにして、茶会を共感の場とすることであると考える(笠井,1991)。『山上宗二記』における「又十体」の項の前半には、一座建立のための客の心得、そして亭主の心得について順に記されている。例えば、客は、露地に入るところから出る時まで、一生に一度の出来事、つまり「一期一会」と思って、亭主を畏敬し、誠心誠意、亭主の心入れを汲み取る必要があるとされる。さらに、一座建立は客よりも亭主の心得の如何にかかっていると続く。無言で茶をたてるべきだ、立場が上の人だけではなくすべての人を心の底で尊敬することが必要である、気の合った客でなければ一座は建立されない等様々な内容が書かれているが、つまりは客と亭主の種々の心得によって一座建立は成り立つとされている。また、笠井(1991)は、一座建立という言葉が世阿弥の『風姿花伝』にも登場することを指摘し、能とわび茶における一座建立の意味的な違いについて言及している。能においては、初め客はまなざしによって役者を一方的に対象化し批判するため、役者と客の関係は対立している。しかし、役者の優れた演技に呼応する観客の深い感動の中で、最終的には一座建立、つまり美的・精神的な共感の場が成立するとされる。一方でわび茶では、客は亭主の手前を見る者であると同時に喫茶の所作を亭主に見られる者でもある点で、亭主と客の立場は可逆的である。そしてその関係の中で互いに美的な共感を得るのである。客の心得として亭主への畏敬の念が求められるように、必ずしも無条件に共感状態が成り立つわけではないにせよ、一座建立のため、客ははじめから亭主との協力を前提として参加する構造となっている。そしてそのような雰囲気の中で、互いの文化的・美的背景を共有した交流が行われ、最終的に美的な共感の場、つまり一座建立が成立する。つまり能でははじめは対立した関係から役者の優れた演技により一座建立が成立するのに対し、わび茶でははじめから亭主と客の協力が前提とされている。一座建立が成立する際の人々の関係性が異なるのである。

ところで、上記の一座建立を目指す茶会の内容としての、文化的・美的な交流とはどのようなものだろうか。わび茶の世界では、上述した一期一会という、一座建立を支える考え方が背景にある中で茶会が行われる。一期一会の考え方の元では、まったく同じ時、場というもの

は存在しない。よって亭主、そして客は既述のよそおい、しつらい、ふるまいの面でそれぞれ変化する時、場に適したものを示すことを求められる(五嶋・中村,2009)。しかし一方で、わび茶では「型」というものが重視される(五嶋・中村,2009)。例えば移り変わる季節にも春夏秋冬というパターンがあり、客の種類にも目上、親しい間柄かどうか等、ある程度パターンがある。様々なパターンに応じて、よそおい、しつらい、ふるまいにおけるふさわしい型が存在するのである。つまり、基本的には型を守りながら、変化する場に柔軟に対応して亭主はおもてなしをするわけである。言い換えれば、型を踏まえた上で、そこに自分なりの創意工夫、つまり趣向を新たに加え、亭主はもてなしにストーリー的な価値を持たせる必要があるということである(五嶋・中村,2009)。わび茶では亭主が選んだ好みを重視し、茶道具や床の間の装飾等に反映する(松岡,2006)。そして、この趣向による新たな創造が喜ばれるならば、それはまた新たな型となっていくのである。この型を示すことと、それを一期一会の思想の元に新たな創意工夫として示すことにより構成されるおもてなしと、それに対する客の反応を中心とした交流がわび茶における美的・文化的交流の中心である。この型を示すことと、それをさらに趣向により創造的に変化させ、客がそれを喜ぶということは、亭主と客とがある種の文化的・美的・感覚的背景を共有できて初めて生じると考えられる。この点に関しては、次に述べる、わび茶における「見立て」についての内容において詳述する。

上述のように、わび茶では亭主と客が共通の理解を持つ範囲において、ストーリー性を持った新たな創造が起きうると考えられるが、そのようなものに関する技法のひとつとして、見立てというものがある。相島(2016)によれば、見立てとは「あるもの A を、別のもの B になぞらえて(置き換えて)見ること」である。日本庭園における枯山水が例として挙げられており、白い石や砂は水の流れに見立てられており、見る者はそれを石や砂でなく水の流れとして見て、感じることを求められる。茶の湯においては見立ては 2 つの意味を持つとされる。茶道具でないものを茶道具に見立てるということをわび茶においては行うが、例えば西欧の陶磁器やガラス製品をあえて茶道具として見立てるということをする。その際、茶道具の選定という現実的な意味に加えて、眼前の世界とは別の世界を相手と共有しようとするという意図を伴う新たな意味が発生するのである(相島,2016)。見立ては、このように、目の前の現実と異なる心理的世界を二重写しのようにする技法である。安田(1964)は、新古今和歌集にある歌の大半がこの種の見立て技法により成立していることに触れつつ、千利休が茶の湯を確立する上で、藤原定家に大いに影響を受けていることを指摘している。藤原定家の「見渡せば 花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮」という歌は、歌人と聞き手がある程度共通性のある花、紅葉を想像することで成立する。「花も紅葉も」で、聞き手は桜花や紅葉を想像するが、その世界は次の「なかりけり」で一瞬で消え去る。つまり、目の前の風景に違う風景を重ね、さらにそれを否定するという手法である。花や紅葉を想像させ、直後にその映像を否定することで、「あり」と「なし」の落差が強調される。それにより、「なにもない」ただの殺風景ではなく枯淡静寂の世界が広がるとされる(安田,1964)。千利休に関しては茶会に客を招いた際、花を入れずに花入れを飾ったという記録が残されている(筒井,2015)。水入れにはなみなみと水が張ってあり、「花入れを見ながら、どうぞ皆さんめいめいに花を想像してください」という趣向であったという(筒井,2015)。これは現実には花が飾られていない方が、空間が引き立つという発想である。現実の茶室空間を

引き立てるため、それぞれが花を想像するという形で各々の心理的空間を重ね合わせるわけである。そのような技法は上記の藤原定家の歌に見られる見立てに通じるものであると考えられる。このような、「ない」ものを「ある」と見立てる趣向は、その意外性により客に驚きをもたらしたと考えられるが、相島(2016)によると、その手法は意外性だけを目的としたものではない。そこにはストーリー性が存在する必要がある。例えばガラス製の器を茶道具に見立てる場合、客に涼しさを感じてもらえることができる。これは非常に暑い日に客に少しでも涼んでもらおうと、通常の茶道具を使わないという意味で、あえて型を外すわけである。ここにストーリー性が生じる。一期一会の思想の元、他にもない「その日」のための熟慮の結果がストーリー性をもった見立てに繋がる。それを客は感じ取り、例えば言語的・非言語的表現によって感謝の心を表現する。それにより美的共感の場、あるいは一座建立といわれるものが成立するのである。ただし、ガラス製品で涼むなどは、視覚的效果として感覚的に亭主の意図が伝わりやすいが、より古典の知識や教養が必要な見立てとなると、客もある程度の学習を求められることになる。いずれにせよ、客も積極的に感性を研ぎ澄まし、茶室のしつらいや亭主の動き、それが表現するストーリー性に注意を払う必要があるのである。以上のように、見立てが機能するためには、客側も亭主の意図を読み取り、感謝・感動できる内的な状態を持つことが必要とされるのである。そのような意味では、客もみずから見立てに参加し、場の価値を高めていく役割を担っていると考えられる(相島,2016)。そして亭主側も、客の理解できる範囲の見立てを提供する必要がある。このような意味でも、茶会における一座建立の成立は亭主と客の協力関係に支えられているといえる。このような見立てをとりまく亭主と客とのやり取りにおいて、相島(2016)は、互いが義務を果たそうとするよりも、むしろそれを「より良く」果たそうとして現実的、あるいは内的な準備していることを重要な点として挙げている。また、その「楽しみ」「遊び」の要素についても言及している。亭主と客が本気で相対するような空間であっても、一座建立が成立するとき、どこかで遊びの雰囲気があるという。続けて相島(2016)が、緊張感と一回性の雰囲気のある心理的空間において、本来の様式をあえて外してみせるという「遊び」の発想により、場にむしろ楽しむような雰囲気が生じることを指摘している点は興味深い。型をあえて外すという遊びの要素が、同時に一期一会であるその瞬間に適したものである場合、それはストーリー性をもつ美しいおもてなしとみなされ、ひいては美的な共感の場の成立、すなわち一座建立へと繋がるものへとなるわけである。

6. 心理臨床文化との比較・検討

(1) 茶の湯文化の空間構造と心理臨床

以上、わび茶のもつ心理・空間的な構造について述べてきた。以下に詳述するが、わび茶のもつ心理・空間的な構造は様々な点で心理臨床における心理・空間的な要素に通じるところがあるように思われる。はじめにも述べたが、心理臨床と茶の湯、特にわび茶文化における心理・空間的な比較は、両者にとって有用な知見をもたらすと考えられる。具体的には、共通点・相違点を明らかにし、共通点と考えられる部分からは互いの詳細な知見を有用なものとして「輸入」し合えと考えられ、相違点からはその点を起点としてそれぞれの特徴や互いに取り入れる可能性のある要素について考察することができるだろう。以下、心理臨床と茶の湯文化における心理・空間的共通点・相違点について述べ、それぞれ得られる知見に関して考察していく。

まず、わび茶の空間的構造から考えられる点について述べる。わび茶では、露地という庭空間を通り、茶室に至るのであった。この露地は、蹲で身を清めるなどすることにより、茶室空間に非日常性を生じると考えられた。心理臨床においても、時間を同じ曜日、同じ時間帯、同じ場所等に設定する治療構造(小此木、1990)、あるいは枠という考え方により、面接空間に非日常性を与えるということがなされている。この点に関しては、心理臨床、わび茶文化共に共通の要素とも考えられる。また、露地は自身が通ってきた場所を鑑賞の対象とするという点から、自身の通ってきた道、すなわち過去を「いま」美的に味わうといった象徴的意味を帯びているとも考えられた。Okakura(1906)は「影のような過去の夢の中になおさまよいながらも、やわらかい靈光の無我の境地に浸って、渺茫たるかなたに横たわる自由をあこがれる新たに目覚めた心境」を露地において感じる心境を描写している。この点はわび茶に独特の点かと思われるが、精神分析における、転移という概念が有するニュアンスにもそれに近いものがあると考えられ、興味深い。転移とは患者やクライエントが辿ってきた過去の体験がまさに分析場面で再現されるという現象を示す概念である。分析家、あるいはセラピストは、患者、あるいはクライエントと共に「いま」の体験としてその現象を共に観察するが、過去の要素を現在において新たに扱うというような点に関して、わび茶における露地が空間構造的に有する要素と近似していると考えられる。

また、茶室には躡口が設けられており、当時帯刀しての入室が不可能であった。このことから、茶室空間内での現実的な何らかの力の行使は望ましくない、あるいは不適切であるような自然な心理的戒めが構造的に空間内にもたらされたと考えられる。上田(2013)は、心理療法における可能性空間の崩壊現象について述べる中で、可能性空間が崩れてくる際に、クライエントの不安や危険と認識される現実がまさに物理的・物質的な危機となりうることを指摘している。そしてそうした危機は実際にマネージされ、何らかの具体的な対応を取るほかないとセラピスト・クライエント間で感じられるものとなると述べている。ここからは、現実的な何らかの力を空間内部の者が行使することを欲する際には、それは当事者がそのうちに含まれている可能性空間が、何らかの形で損なわれている可能性があると考えられる。可能性空間に関しては後に詳述するが、わび茶においては、帯刀が不可能な構造を茶室空間にもたせることで、象徴的に実際のな力の行使をタブー化し、可能性空間の崩れに対し、参加者がそれを自然と避けるよう、そこに展開される心理的空間が構造化されていたとも捉えられる。この点、心理臨床においては治療構造、あるいは枠という設定や概念があることで、現実的な力の行使、例えば面接時間の変更など枠を動かすという具体的・現実的動きに関してセラピストが知覚しやすい構造とはなっているが、その事態が可能性空間の崩れに繋がり得るというような視点については個々のセラピスト・クライエントの感覚や理解に一任されている部分が強いとも考えられる。

また、茶室の狭さについても述べられた。心理臨床場面で用いられる部屋も多くはそう変わらない広さであると考えられる。しかしセラピストは、施設や所属する場の求めに応じて、場合によっては広い部屋を用いることもあるだろう。その際、広い部屋ほど、緊密なやり取りをすることが難しくなりうる空間構造であること、そしてその場に生じる緊張感がやや緩む等の空間構造的違いが影響してくる可能性への配慮が必要となると考えられる。

また、茶室空間が、基本的には「わび」が協調され、装飾性を排して簡素に作られるのに対し、同時に「しつらい」等に関して携わる者の趣向を集中的に凝らすことが求められるという構造についても述べておきたい。つまり茶室空間内は基本的には簡素だが、限られた部分においては亭主の好み色が濃く反映される(五嶋・中村,2009)。このことは何を意味するのであろうか。藤山(2003)は、精神分析の歴史をたどる中で、フロイトなど初期の理論形成に携わった者たちのオフィスの雰囲気は、本人たちの趣向が凝らされたものであった点について述べている。また、フロイトが自身の生計を数人の患者に頼っていたという事実などを指摘している。このように、初期の理論は、非常にプライベートな雰囲気のある空間や関係性においてなされた分析から生じてきている点を指摘している。また、昨今のセラピストが公共の施設などでの心理臨床を行う場面が多くなってきており、プライベートな空間においての実践を行うことが減ってきている状況について触れ、精神分析や心理臨床の実践が行われる空間のもつパブリック性やプライベート性が実践に与える影響について考えることの重要性を指摘している。藤山(2003)も述べているように、公的な機関というものが背景に存在する中では、セラピストは一種の安心感を覚える一方で、自宅等のよりプライベートな空間においてなされる実践におけるほど、クライアントの振る舞いに表現される転移をより差し迫った体験として捉えることができない可能性があると考えられる。というのも、プライベートな実践においては、部屋の中の調度品は基本的に分析者・セラピストが選んでおり、それに対する患者やクライアントのコメントはより転移・逆転移の関係性を生じるような、分析家側のファンタジーに関連するような差し迫った感情的体験を生じることが予想されるからである。この点に関してはより詳細な議論がなされる必要があるようにも思われる。しかしその上で、今回、上記のようなわび茶における、亭主が趣向を凝らすことにより成立する一座建立という考え方は、その点に関して現実的な実践面でのひとつのヒントを与えうるものであると考えられる。例えば臨床場面においてセラピストが選択し面接室へと持ち込む手帳や服装等は、その日の面接空間に適したものとしてセラピストに選ばれている点において、茶の湯文化における「しつらい」「よそおい」に似た作用をもつものとしてクライアントに感じられる場合があるだろう。それは空間にプライベート性を付与し、転移・逆転移が色濃く感じられる装置となる可能性があると考えられる。そのような可能性があることに対してセラピストが理解しておくことはクライアント理解に資する可能性があり、有益と考えられる。

(2)茶の湯文化の運用的構造と心理臨床

そして茶会の運用的観点から指摘できる茶の湯文化の構造について述べた。具体的には「一座建立」という場を成立させるという意味での茶会の目的に関して述べた。能との比較から、能ではまず役者と観客との対立関係があり、役者の演技の優れていることによって観客との間で美的共感が成立する形であるのに対し、わび茶では初めから客の亭主に対する協力が前提となっていた。またわび茶における一座建立では、客が亭主とある程度文化的、美的背景、つまりわび茶的文化を共有していることが前提として想定されていた。藤山(2003)は精神分析に関して、多くの場合、患者・あるいはクライアントが「精神分析文化」を内在していない状態で「なじむ」ところからスタートすると述べている。このように、精神分析、あるいは心理臨床実践領域では実践の開始時点で、その具体的方法や、それに関連したそこに流れる独特の雰囲気

気等といった「文化」についての理解がセラピスト・クライアント間での共有がなされていない場合も多々あると思われる。このような観点からも、わび茶文化のような協力体制は直ちにはスタートしないであろうことが予想される。そのような点では、精神分析、あるいは心理臨床の実践においては、初期はむしろ能における役者と観客のような対立した関係に近い場合もあると考えられる。能では役者の演技の力量により場が成立するが、心理臨床の場合、クライアントは何をもってセラピストに共感、あるいは心理臨床の文化に「なじみ」、協力するようになるのであろうか。この点に関しては今後より詳細な検討が必要であろう。一方で、藤山(2003)のいう「なじむ」という過程は、案外、精神分析文化を世に広めることで、つまり患者となる人々が予め精神分析、あるいは心理臨床の文化を内在化していることで、患者とのある種の協力体制の形成は、上記の意味ではより容易になる可能性もあると考えられる。そのような意味では、心理臨床における文化や背景を、社会に向けて発信することの重要性も考えられるだろう。勿論、その観点においては、単純にわび茶における一座建立という考え方が、精神分析、あるいは心理臨床にそのまま適用することはできないということについては注意する必要がある。

しかし一方では、一座建立と第三主体の考え方に共通点があることにも触れておく必要があるだろう。Ogden(1994)は第三主体は分析家・被分析者が共同で作り出していくと述べており、一座建立が亭主と客の協力により成立することを強調していることから考えると、二者が共同で作り出すものといった点では共通していると考えられる。しかし Ogden(1994)のいう共同という言葉が無意識的なものも含んだものであることを考慮するならば、一見意識的には対立するような関係性でも第三主体は生じるという可能性が考えられる。心理臨床における実践では、上記の「なじむ」ことに関する議論でも軽く触れたように、必ずしも直ちにわび茶における一座建立のような意識的な共感性に彩られた場が築けない場合も多いと考えられ、当初から無理にそのような意味での共感を目指すべきではない場合も多々あると考えられる。ただし、この第三主体的な場が無意識的に生じることを考慮するならば、わび茶における一座建立の概念はむしろ無意識という観点でもって拡張しうるようにも思われる。一見意識的な意味では対立し、共感の場が築けないような場合も、無意識的には協力しているような関係性が想定されるからである。陰性転移として精神分析、あるいは心理臨床領域において知られてきたものはその最たる例のように考えられる。例えば、クライアントが意識的にはセラピストに対して陰性の感情を経験している場合である。その感情は意識的には両者の関係性にとって非共感的に作用するように考えられる。しかしその感情を分析していくことはクライアントにとってより本質的な理解に至りうるようにも無意識的には感じられるため、クライアントは非共感的な感情を経験しつつも分析のモチベーションにより関係を継続しうる。この場合は無意識的には協力関係にあると考えることもできよう。わび茶の領域でも、意識的共感が完全には成立していないように考えられる場合もあるだろう。そのような場合でも、無意識的には共感が成立しているように考えられる場合があるのではないだろうか。また心理臨床領域では、セラピストや分析家による一座建立的な意識的共感を生じることについて検討することには意味があると考えられる。一座建立においては亭主は型を守るだけでなく、それを文脈において外すこと自体がおもてなしとして共感の場を生じるように、心理臨床分野においても、ある種の定石をクライ

エントの文脈に依じて外すという「遊び」の要素を含んだ行為自体が、患者やクライアントとの間の意識的な共感的な場を生じることに関連する可能性があると考えられる。そしてその共感の場の成立自体が、時として非常に意味を有する場合もあるだろう。それは共感性を非常に意識する場でもあり、同時にある種の一体感を感じる場でもあるように考えられる。この、心理臨床における一座建立的関係性の成立という観点は、今後より詳細に検討する余地があるように思われる。

続けて、上記のような「遊び」の要素を含むものとして、わび茶における見立てについて述べた。見立ては、心理的空間にある種の重層性を持たせる技法と考えられた。精神分析の文脈において述べられる可能性空間とは、「ある」「ない」など、様々な可能性が生じうる心理的空間とされた(上田,2013)。わび茶では、上述の千利休の花の入っていない花入れを飾ったというエピソードに代表されるように、「ある」「ない」といった可能性を意外性と共に心理的空間内に生じさせる技法であるとも捉えられるだろう。その技法は空間に複層性を持たせ、精神分析という可能性空間を担保する構造を有しているとも考えられる。また、見立ては、亭主と客の関係性の文脈、季節、その日の天気、客、亭主それぞれの感覚的、感情的文脈といった多様なチャンネルについての潜在的なストーリー性に関する亭主の熟慮の上でなされる、一期一会の思想に根差した、一回性の強い「遊び」でもある。これらが亭主と客のあいだで真に共有され理解された場合、それぞれのチャンネルの数だけ、共有される心理的空間はその意味的な重層性を増すと考えられ、豊かな美的共感に彩られた一座建立という場の成立へと繋がると考えられたのであった。この心理的空間の重層性は、様々なストーリー性のある意味的な可能性を生じるという点において、可能性空間の観点からいっても豊かなものであると考えられる。またそれらは亭主の明確な熟慮でありながら、客との間で言語的に説明されずに共有されることで成立するといった点も重要であろう。意味が説明されず共有されることで、それぞれの意味はそうであるかもしれないし、そうでないかもしれないものとして、可能性空間を豊かにするのである。心理臨床においても、言語化をせずに共有するという点を重視した方法として箱庭療法というものが存在する。河合(1984)によれば、箱庭は性急に言語化することを避けた状態で、全体の視点をもって臨むものであり、見守り手であるセラピストと作り手であるクライアントの深い人間関係が成立したうえで、感動的な作品が出来上がるという。河合(1998)は「すごい」箱庭の特徴として、思いがけない表現、展開の意外さ、美的な感動などを挙げているが、わび茶における「すごい」見立ても、上記の観点も含めて、同様の要素を有する可能性が考えられる。つまり、ひとつの見立ては、客にとっては意外で思いもかけない表現であるが、そこに亭主の様々な文脈における熟慮を非言語的に想定することで、意味的な可能性を重層性として有する心理的空間を成立させる。それは豊かな可能性空間としても捉えられる。箱庭においても、そこに生み出される意味の複層性、生み出される可能性空間の豊かさが、「すごさ」として感動を生じている可能性が考えられる。そのように考えた場合、わび茶における客と箱庭におけるセラピストは本質的には非常に似た作業に携わっている可能性が考えられるのである。いわば、わび茶における亭主は箱庭の作り手、客はセラピストである。あるいは箱庭の作り手の無意識が亭主、セラピストと作り手の意識が客である。箱庭では作り手の無意識が意識のもつ文脈に対し様々なチャンネルにおいて適当な表現を用いて「おもてなし」する。それは無意識的内容

であるため、構造的にクライアントの意識はそれを把握しがたく、セラピストと言う補助役を必要とするが、セラピストという様々なチャンネルに開かれている補助役と、その助けを借りた作り手の意識は、その表現のストーリー性をもった適当さを、様々な点から非言語的に感じて感激し、場にある種の意味の可能性の複層性を含む共感的な空間が生じることが考えられる。このような構造は、箱庭における作り手の無意識を心理臨床の実践におけるクライアントの種々の語りや表現というものに置き換えた場合、様々な状況において適用可能な考え方にもなりうると考えられる。いずれにせよ、上記のような豊かな可能性空間に寄与するような、心理的空間の重層性・複層性は、心理臨床においてはセラピストの理解や認識の能力に支えられ、担保されると考えられる。つまりセラピスト、あるいは分析家が、複数の意味的、あるいは非意味的、そして意識的、無意識的な複数の展開に開かれているということが、結果的に豊かな第三主体としての心理的空間が生じることに寄与しうることが考えられる。そしてその心理的空間は重層性・複層性、あるいは深さの印象を内部に含まれる者たちに与えると考えられる。わび茶では空間に重層性や深さをもたせるしくみがおもてなしの技法により構造化されているが、心理臨床においてはそれはセラピストの内的な理解や認識の能力に依存すると考えられるため、その点においてセラピストは内的に準備をしておく必要があると考えられる。また 上記の観点では 豊かな可能性空間を担保するのが 言語化された意味によってではなく非言語的に想定され共有されている意味によっている点は、わび茶や箱庭といった日本で広まっている技法に共通する部分とも考えられ、日本文化に適合する方略として重要であると考えられる。このような、豊かな可能性空間を担保する非言語的な意味の共有に関しては、今後詳細に検討していく余地があると考えられる。

さて、ここまで何度も「美」という言葉が登場した。しかし、美とはそもそも何なのであろうか。Meltzer(1988)は、乳児にとっての母親を人間にとっての美の源流とし、その外在性への対処のため、人間の美に関する理解は促進されるとした。つまり乳児にとっての母親という万能的なものの不在状況に代表されるような人間の、わからなさや付随する苦痛に耐えつつ、理解をすすめていく過程を美的体験とした。ここでは美は歓び、感動を生じるものとしてよりも、その裏側にあるわからなさ、苦痛といった側面に焦点を当てて述べられている。その点、茶の湯では、一座建立による美的共感の場の成立を目的とするということであったが、その場では上記の美の負の側面は影を潜めているように思われる。それは、一座建立は客と亭主との協力が前提となっているからと考えられる。客は、亭主が自分のために配慮し、自分が理解可能な範囲で型や遊びを示すことを期待する。そしてその期待に応えた亭主の配慮によって構造的に、参加者が理解することができない可能性のある、圧倒的に苦痛なわからなさを秘めた美に出会うことから守られていると考えられる。その構造に客側の亭主の配慮への期待なども含まれているとするならば、そこには土居(1971)のいう甘えの構造のようなものもみられると考えられるだろう。また、わび茶では Okakura(1906)も述べたように「足らずの美」として非万能性のある種の前提とする美の文化であることから、わび茶においては Meltzer(1988)のこのような美の有する苦痛な側面は、ある種の前提としてやわらげられていると考えられ、むしろ共感・喜びの手段という側面が強調されていると考えられる。そこに厳しさをもった強力な美的体験を付与できるかどうかは、亭主の人格、や客の度量、あるいはそれぞれの能力に任せられていると考

えられる。半面、精神分析、あるいは心理臨床では、その厳しさに着目する傾向が比較的強いとも考えられる。また、美的体験のもつ苦しさの側面への視点は個々のセラピストにゆだねられているともいえ、各セラピストは、美的体験の持つ苦しさの側面を理解しつつ、それが共に持つ、歓び、楽しみの側面を共に味わう視点も忘れないことが重要と考えられる。

以上、茶の湯における見立てのように、心理臨床分野と茶の湯文化を重ね合わせるようにして、茶の湯、特にわび茶文化と心理臨床文化との比較を行ってきた。その方法によって両者の共通点と相違点を述べ、それぞれに有用と考えられる知見を探ってきた。空間的観点からは、茶の湯のわび茶文化において空間構造的に規定されている非日常性や、Winnicott(1971)のいう可能性空間の保障が、心理臨床の実践場面において治療構造、あるいは枠の設定とそれに対するセラピストの理解と態度によってなされうること等がわかった。また現代の臨床実践の現場である空間のパブリック性、プライベート性に関する議論についてわび茶における「しつらい」「よそおい」の観点から検討された。そして運用的観点からは、一座建立という茶の湯のわび茶文化における空間成立現象に関する概念から、心理臨床の実践初期においてクライアントが心理臨床の文化に「なじむ」上で必要と考えられる点に関する知見が得られた。また、Ogden(1994)の第三主体概念との比較から、意識的な協力に重きが置かれているような一座建立概念を、無意識的な関係性の観点から検討した。またわび茶における見立て技法が生じる意味的可能性を有する重層的な心理的空間が、豊かな可能性空間の観点から論じられ、それらの空間を支えているのが非言語的に共有された意味であることから、箱庭療法との共通性が示唆された。そしてそこから、他の心理臨床実践においても、豊かな可能性空間を担保する非言語的意味の共有の重要性についての視点が得られた。そして最後に、Meltzer(1988)の美概念を中心とした比較により、茶の湯のわび茶文化において、美の感動や喜びの面が強調されるのに対し、心理臨床実践においては比較的美の苦しさの方へ着目される傾向について考察され、苦しさによりそう視点と美的体験のもつ感動や喜びの視点をセラピストがもつことの重要性について述べられた。概して、茶の湯におけるわび茶文化においては空間構造や運用的構造に規定される種々の重要な要素が、心理臨床場面においてはセラピストの理解や態度など内面的なものに任されているということが明らかとなった。そのような意味でも、セラピストが、心理臨床実践における種々の要素と共通性を持つと考えられる文化の内容を自身で理解しておくことは役立つ点も多いと考えられた。

今回、日本文化に関係する空間論として重要と考えられる精神医学における木村(1981)によるあいだ論、また西田(1927)の場理論などには紙幅の都合上触れられなかった。また、本論では主に茶の湯文化に触れたが、奥深い茶の湯の世界のほんの一部を検討するにとどまった。また種々の議論に関しても更なる検討の余地が残されていると考えられる。これらの点に関しては今後取り組むべき課題として残されている。

文献

- 相島淑美 (2016): 見立てから始まるおもてなしの価値共創—連歌、茶の湯を中心に—, 日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディングス、5, 393-403
- 土居健郎 (1971): 「甘え」の構造, 弘文社.

- 藤山直樹 (2003) : 精神分析という営み: 生きた空間をもとめて. 岩崎学術出版社.
- 久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎(編) (1958) : 新古今和歌集. 岩波書店.
- 五嶋正風・中村孝太郎 (2009) : サービス価値共創と日本の伝統的な「主客一体: 「おもてなし」文化における主客の関係とは. 研究・技術計画学会年次学術大会講演要旨集, **24**, 513-516.
- 笠井哲 (1991) : 茶の湯における「交わり」について. 哲学・思想論叢, **9**, 69-81.
- 河合隼雄・中村雄二郎 (1984) : トポスの知: 箱庭療法の世界. TBS プリタニカ.
- 河合隼雄・村上春樹 (1999) : 村上春樹, 河合隼雄に会いにいく. 新潮社.
- 木村敏 (1981) : 自己・あいだ・時間. 弘文堂.
- 松岡正剛 (2006) : 日本という方法. NHK 出版.
- 守屋三千代 (2013) : 日本語と日本文化における< 見立て> 日本語日本文学, **23**, 1-14.
- Meltzer, D.・Williams, M. H. (1988) : The Apprehension of Beauty ; The Role of Aesthetic Conflict in Development, Art and Violence. Karnac Books. 細澤仁(監訳) (2010) : 精神分析と美. みすず書房.
- 中藤信哉 (2013) : 集団における居心地の悪さ——青年期における居場所の視点から 心理臨床学研究, **31**, 4, 618-628
- 西田幾多郎 (1927) : 西田幾多郎哲学論集. 岩波書店
- Ogden, T.H. (1986) : The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue. UK: Jason Aronson Inc. 狩野力八郎(監訳) (1996) : こころのマトリックス 対象関係論との対話. 岩崎学術出版社.
- Ogden, T.H. (1994) : Subjects of Analysis. Jason Aronson Inc. 和田秀樹(訳) (1996) : 「あいだ」の空間—精神分析の第三主体—. 新評論.
- Okakura, K. (1906) : The Book of Tea. Duffield & Company. 村岡博(訳) (1961) : 茶の本. 岩波書店.
- 小此木啓吾 (1990) : 治療構造論の展開とその背景. 精神分析研究, **34**, (1), 5-24.
- 筒井紘一 (2015) : 利休の茶会. 角川書店.
- 上田勝久 (2017) : 精神分析的マネージメント—その時間的側面と空間的側面について. 精神分析研究, **61**, (3), 380-387.
- 上田勝久 (2013) : 心理療法空間を支えるもの—可能性空間の維持と崩壊. 心理臨床学研究, **31**, (2), 188-198.
- 和田秀樹 (1996) : 訳者イントロダクション. Ogden, T.H. (1994) : Subjects of Analysis. Jason Aronson Inc. 和田秀樹(訳) (1996) : 「あいだ」の空間—精神分析の第三主体—. 16-17. 新評論.
- Winnicott, D.W. (1971) : Playing and Reality. Tavistock Publications Ltd, London. 橋本雅雄(訳) (1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社
- 山上宗二 (1588) : 山上宗二記. 竹内順一(編) (2018) : 山上宗二記. 淡交社.
- 安田章生 (1964) : 茶道と定家. 松蔭国文学, **2**, 1-5.

(臨床心理学コース 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2020 年 8 月 31 日、改稿 2020 年 11 月 10 日、受理 2020 年 12 月 7 日)

心理臨床を茶の湯に見立てる

—心理臨床と茶の湯文化の心理・空間的比較—

藤本 航平

本論文は心理臨床分野と日本の茶の湯文化との間の心理・空間的な概念的要素の比較を行うことによって、両者の共通点と相違点を述べ、それぞれに有用と考えられる知見を探ったものである。その結果、全体として、茶の湯文化に構造的に規定されていると考えられる、可能性空間を担保し非日常性を空間に付与するような要素は、心理臨床の実践場面において治療構造や枠に加え、セラピストの理解や態度に大きく規定されていることが明らかとなった。また茶の湯における見立て技法に関する比較から、心理臨床の実践において豊かな可能性空間を形成する上で非言語的に共有される意味が重要となる可能性が指摘された。また Meltzer の美概念を中心とした比較から、心理臨床の実践場面においては美の負の側面に着目する傾向が指摘され、セラピストがその視点と共に美の感動や喜び、そしてそれを通した共感的関係性に開かれることの重要性について考察された。

Making clinical psychology look like tea ceremony: psychological spatial comparison of clinical psychology and tea ceremony

FUJIMOTO Kohei

This article makes a comparison between clinical psychology and Japanese tea ceremony culture, and describes common points and differences regarding psychological spatial concepts, and explores useful findings of each. The spatial structural elements of tea ceremony culture that secure the potential space and give extraordinariness to the space are largely defined by the therapist's understanding and attitude in addition to the therapeutic structure and framework in the clinical practice of psychology. In addition, a comparison of the "mitate" technique of tea ceremony suggested that nonverbal shared meaning may be important in forming a rich potential space in the practice of clinical psychology. A comparison centered on Meltzer's concept of beauty indicated that there is a tendency to note the negative side of beauty in the clinical practice of psychology. It is important that therapists are open to joy of esthetic experience, and empathic relationships through it.

キーワード： 可能性空間、第三主体、美的体験、わび茶、茶の湯、日本文化

Keywords: potential space, the analytic third, the aesthetic experience, wabicha, tea ceremony, Japanese culture